



Title	第1章 本巻の構成
Author(s)	敦賀, 和外
Citation	GLOCOLブックレット. 2012, 9, p. 6-7
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/48239">https://hdl.handle.net/11094/48239</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 第1章 本巻の構成

敦賀和外 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授

本巻は、2011年10月26日から11月3日の期間に米国サンフランシスコで実施された「新咸臨丸プロジェクト2011 “Building Back Better, Go Beyond Crisis”」の活動記録である。

「新咸臨丸プロジェクト」は、2010年に大阪大学の創立80周年を記念し、サンフランシスコ教育研究センターと産学連携推進本部(現産学連携本部)が立ち上げた事業である。同事業は、1860年に咸臨丸号で太平洋を渡って米国社会を見聞し、その後の日本の近代化に大きく影響を与えた勝海舟や福沢諭吉のスピリッツを次世代に継承すべく、サンフランシスコ・エリアに学生を派遣して研鑽を積んでもらうことを目的としている。

第2回目となった2011年は、理系の大学院生を中心とした19名が参加した。彼らは、2011年3月11日に発生した東日本大震災からの復興について米国の学生と熱く議論するとともに、カリフォルニア大学バークレー校、スタンフォード大学及びシリコンバレーを訪問し、自らの研究とキャリアを考えるうえで大いに刺激を受けて帰国した。

本巻では、まず第2章から第5章において「新咸臨丸プロジェクト」の運営体制、広報・公募方法、参加学生及び事前学習の概要を示している。

第6章では現地での研修概要及び10月27日にカリフォルニア大学バークレー校で実施されたシンポジウム「Towards a Sustainable Energy Policy after FUKUSHIMA」の記録として本学レーザーエネルギー学研究センターの高部英明教授による基調講演の資料を掲載し

ている。また、10月30日から31日にかけて行われた日米学生討議に先立ち、参加学生の安藤智弥君がイニシアチブをとって実施した「ワールドカフェ」について寄稿してくれている。30日には、東日本大震災で被災した東北地域等とサンフランシスコをスカイプ中継で結んだ講演会「Voice from Tohoku」も実施されたが、同講演会で発表いただいた岩手大学地域連携推進センターの小野寺教授、宮城県庁の講演資料も掲載している。

第7章では日米学生討議で学生たちが4グループに分かれて作成したプレゼンテーション資料を掲載している。同プレゼンテーションを基に、学生たちの主体的な発案で「震災復興+ design competition」というデザインコンペに参加した。

第8章では、帰国後に学生たちが作成したレポートを掲載し、「新咸臨丸プロジェクト」に参加して感じたこと、考えたことが示されている。

### 海外体験型教育プログラムとしての「新咸臨丸プロジェクト」

大阪大学グローバルコラボレーションセンター(GLOCOL)は、海外での実地体験型学習と実践をサポートすることを目的とする「海外体験型教育企画オフィス(FIELDO)」を2010年8月に設置した。同オフィスは、大阪大学の全学の大学院生を対象とした海外インターンシップやフィールドスタディ・プログラムなどを学内の様々な部局と協力しつつ企画し、地球規模の諸課題に主体的に取り組むことので

---

きる人材の育成に取り組んでいる。2011年には、フィールドスタディをバラオ、タイ及びフィリピンで実施し、インターンシップは、米国（ニューヨーク）、フランス（パリ）、ホンジュラス、インド、タイ、ケニアの国連機関、援助機関及びNGOへの学生派遣が実現した。

GLOCOLは、「新咸臨丸プロジェクト」に当初関与していなかったが、サンフランシスコ教育研究センターの久保井センター長の熱心な働きかけにより、私がメンターとして参加することとなり、現地プログラム内容及び学生の活動を直接的に知る機会を得た。今回の参加を通じて、「新咸臨丸プロジェクト」が GLOCOLの実施している海外体験型教育プログラムと高い親和性を有していることが理解できた。学生達が主体的に現地での活動に取り組む姿勢及び体験学習の効果を事前学習、実習及び事後学習を通じて高めていくプロセスは、GLOCOLの海外体験型教育プログラムと共通している。特筆すべきは、理系学生の意欲の高さを目の当たりにしたことである。学生の内向き傾向が昨今指摘されているが、そのステレオタイプを覆す意欲と熱意に満ち溢れた学生達の現地での様子を観察し、「新咸臨丸プロジェクト」の海外体験型教育プログラムとしての潜在力を感じることができたのは大きな収穫であった。今後、サンフランシスコ教育研究センター及び産学連携本部と協力し、「新咸臨丸プロジェクト」の発展に寄与していきたいと考えているが、同プロジェクトの活動記録をGLOCOLブックレットとして出版することができたのは、大阪大

学の資源を有効活用し、大学全体として海外体験教育を推進していくための大きな一歩となるう。